

(1) 北信地域における弥生時代中期後半から後期初頭の石器組成

- 栗林式期から吉田式期を対象として -

村井 大海

1 はじめに

中野市南大原遺跡は本年度を含め5次にわたる発掘調査が実施され、長野県埋蔵文化財センター（以下当センターという）では2011～2013年度にかけて、一般県道三水中野線建設事業に伴う発掘調査において、弥生時代中期（栗林式期）・後期（吉田式期）の遺構を多数調査した。堅穴建物跡からは鉄鎌および鉄斧と推定できる鉄器が出土し、さらに鉄器加工関連遺構の可能性があるものも確認され、またそれらの遺構に伴い多数の石器が出土した。これらの遺構・遺物に関しては2016年に報告書が刊行されている（鶴田・町田2016）。

そして本年度、当センターでは2011～2013年度の発掘調査範囲の隣接地において発掘調査を行い、弥生時代中期・後期の遺構を確認し、中期の堅穴建物跡から鉄器加工に関する可能性のある炉跡および、鉄製品と小鉄片を検出した。そしてこれらの遺構に伴い石器も多数出土した。これらの遺構・遺物については現在基礎整理を進めていく段階である。

北信地域において弥生時代中期から後期は水田稲作が定着・安定し、さらに鉄器が導入された時期と位置付けることができる一方で、道具組成に石器が一定の役割を果たすことも事実である。水田稲作の普及や道具の石から鉄への材質転換は、食料や道具等の生産および流通システムの一大変革を伴う事象と考えられる。このような状況において南大原遺跡から出土した石器の位置づけは当地域の弥生社会を考えるうえで非常に重要であると考える。

そこで本稿では弥生時代中期後半の栗林式期から後期初頭の吉田式期に焦点を絞り、当該時期の石器組成を確認し、南大原遺跡出土石器の整理・報告の一助としたい。また当該時期の石器群の特徴および北信地域の生産・流通システムにおける変化過程について石器組成の比率から予測できる

私見を述べてみたい。

なお、本稿で扱う石器は集落遺跡において時期の判明する遺構から出土したものに限定し、遺構の時期を石器の帰属する時期とする。その際、遺跡、遺構からの石器の出土量は問わず、1点のみの出土であっても組成に含む。遺構の時期は出土した土器を基準とし、寺島孝典氏の編年を参考にしつつ、石川日出志氏の編年に従う（寺島1999、石川2002）。

2 石器の分類

本稿では主に生産具や加工具など利器として使用された石器に注目したい。そのため磨製石剣や磨製石戈等の所謂武器形石製品や勾玉、管玉等の石製装身具は組成に含めない。武器形石製品や石製装身具についても、弥生社会の生産・流通システムを考察する際に非常に重要な遺物であり、これまで多くの研究例があるが、これらの石製品と利器として使用された石器では生産・流通システムが大きく異なることが考えられるためである。また、剝片（二次加工や微細剥離痕がある剝片も含む）や碎片も本稿では組成に含めない。

本稿での石器分類は以下の通りである。

○磨製石斧（以下に大別する。）

- ・太形蛤刃石斧
- ・扁平片刃石斧
- ・小形磨製石斧

ノミ形石斧や小礫を研磨し磨製石斧としたものを小形磨製石斧として一括した。

○打製石鎌（以下に細別する。）

- A- 1 : 茎部をもつ短身（長さが幅の3倍未満）のもの
- A- 2 : 茎部をもつ短身で鋸歯縁のもの
- B- 1 : 茎部をもつ長身（長さが幅の3倍以上）のもの
- B- 2 : 茎部をもつ長身で鋸歯縁のもの
- C : 無茎のもの

D：アメリカ式石鏃

E：未製品

F：細別不明

○磨製石鏃（以下に細別する。）

I：長さが幅の3倍未満の短身のもの

II：長さが幅の3倍以上の長身のもの

E：未製品

F：細別不明

○打製石斧（以下に細別する。）

A：長さ15cm以上のもの

イ：長さ15cm以下のもの

F：細別不明

○大型直縁刃石器

長野県においては従来、刃器と報告されることが多い石器であるが（町田 1996）、斎野裕彦氏はこれらの石器のうち長さ10cm以上、刃長9cm以上の直線状の刃部を持つ石器を大型直縁刃石器と命名し、全国的に展開することを明らかにした（斎野 1993・1994）。本稿でも斎野氏の定義に従い、この名称を用いる。

○小型直縁刃石器

従来、刃器や横刃形石器等と報告されていたもののうち、直線状の刃部をもち、長さおよび刃長が大型直縁刃石器未満のものを本稿では便宜上小型直縁刃石器とし、大型直縁刃石器と区分する¹⁾。

○有肩扇状形石器²⁾

南信地域で見られる有肩扇状形石器と形態的に類似するもの。

上記の他、磨製石包丁、磨石、凹石、敲石、みがき石、石鎚、台石、石皿、砥石、石錐、楔形石器、石核に分類する。

3 時期別の様相

（1）栗林1式期

上野遺跡、琵琶島遺跡、檀田遺跡、春山・春山B遺跡、松原遺跡、篠ノ井遺跡群において、当該時期に帰属すると考えられる遺構を確認し、これらの遺構に伴う132点の石器を集計した。太形蛤刃石斧と扁平片刃石斧がほぼ同じ割合でみられる。打製石鏃が多くみられ、そのほとんどがA-1

である。その一方磨製石鏃が少なく、すべてEである。打製石斧や大型直縁刃石器、小形直縁刃石器、磨製石包丁が、石器組成に一定程度認められ、敲石や砥石なども認められる。

（2）栗林1～2式古段階

南大原遺跡³⁾、吉田古屋敷遺跡、春山・春山B遺跡、松原遺跡において当該時期と考えられる遺構を確認し、これらの遺構に伴い29点の石器を集計した。他の時期と比較し集計できた石器が少なく、全体像を反映しているとは言い難いが、栗林1式期同様に打製石鏃の多さが目立ち、磨製石鏃が少ない点は指摘できよう。

（3）栗林2式古段階

柳沢遺跡、松原遺跡、篠ノ井遺跡群より当該時期と考えられる遺構を確認し、348点の石器を集計した。ほとんどが松原遺跡の資料であり、当該時期の松原遺跡の様相が色濃く反映された石器組成となっている。太形蛤刃石斧と扁平片刃石斧が認められ、扁平片刃石斧の出土比率が多い。石鏃は依然として打製石鏃が多数を占めるが、磨製石鏃の割合が増加する。形態は打製石鏃がA-1中心、磨製石鏃がI中心である。打製石斧や大型直縁刃石器、小型直縁刃石器、磨製石包丁の他、南信地域で特徴的にみられる有肩扇状形石器と形態的に類似したものが松原遺跡でみられる。敲石や砥石等も一定の割合で組成している。

（4）栗林2式古段階～新段階

照丘遺跡、柳沢遺跡、南大原遺跡、檀田遺跡、吉田古屋敷遺跡、松原遺跡より当該時期と考えられる遺構を確認し、それらに伴い164点の石器を集計した。多くは松原遺跡出土石器である。2式古段階同様、太形蛤刃石斧に比べ扁平片刃石斧の出土比率が多い。石鏃は打製石鏃が多数を占める中で、磨製石鏃も一定程度認められる。形態は打製石鏃がA-1中心、磨製石鏃がI中心である。打製石斧や大型直縁刃石器、小形直縁刃石器、磨製石包丁の他、有肩扇状形石器が照丘遺跡で認められる。敲石や砥石等も一定程度認められる。

（5）栗林2式新段階

北原遺跡、南大原遺跡、栗林遺跡、徳間本堂原

遺跡、県町遺跡、春山・春山B遺跡、榎田遺跡、松原遺跡より当該時期と考えられる遺構を確認し、2573点の石器を集計した。当該時期の榎田遺跡や松原遺跡、春山・春山B遺跡は太形蛤刃石斧の大規模製作址および生産的分業による遺跡間ネットワークが明らかにされた遺跡である（町田2008、馬場2009）。この時期に太形蛤刃石斧と扁平片刃石斧の比率が拮抗するようになる。石鏃は打製石鏃と磨製石鏃の比率が拮抗するようになり、打製石鏃においてA-1の他、A-2やB-2、Cが僅かながら認められるようになる。磨製石鏃はI中心である。打製石斧や大型直縁刃石器、小型直縁刃石器、磨製石包丁が一定の割合で組成し、敲石や砥石等も認められる。

(6) 栗林2式新段階～3式期

南大原遺跡、栗林遺跡、中俣遺跡、松原遺跡、塩崎遺跡群より当該時期と考えられる遺構を確認し、594点の石器を集計した。太形蛤刃石斧と扁平片刃石斧の出土比率が拮抗している。石鏃の様相は栗林2式新段階と同様の傾向である。打製石斧や大型直縁刃石器、小型直縁刃石器、磨製石包丁が一定の割合で組成し、敲石や砥石等も認められる。

(7) 栗林3式期

徳間本堂原遺跡、県町遺跡、春山・春山B遺跡、松原遺跡より当該時期と考えられる遺構を確認し、540点の石器を集計した。太形蛤刃石斧と扁平片刃石斧の組成比率が拮抗している。石鏃は打製石鏃の比率が磨製石鏃に比べ増える。形態は打製石鏃がA-1中心、磨製石鏃がI中心である。その他、打製石斧や大型直縁刃石器、小型直縁刃石器、磨製石包丁が一定の割合で組成し、敲石や砥石等も認められる。

(8) 吉田式期

千田遺跡、南大原遺跡、長野吉田高校グラウンド遺跡、本村南沖遺跡から当該時期と考えられる遺構を確認し、85点の石器を集計した。吉田式期は栗林式期に比べ石器の出土量が減少する傾向がある。太形蛤刃石斧と扁平片刃石斧がほぼ同じ割合で認められるが、両者とも石器群全体の比率

でみると減少傾向である。石鏃は磨製石鏃の比率が大きくなり、打製石鏃を凌ぐ。打製石鏃にDがみられるようになる。打製石斧や大型直縁刃石器、小型直縁刃石器、磨製石包丁は大きく減少する一方、敲石や砥石は一定程度組成し、特に凹石が目立つようになる。

4 石器組成における変遷と画期

第2図は栗林1式期から吉田式期における石器組成の比率を示したものである。nは各期の石器総数を表し、遺跡数は各期において石器を抽出した遺跡の数を示している。

太形蛤刃石斧や扁平片刃石斧は栗林1式期では両者がほぼ同じ割合で組成するが、2式古段階では扁平片刃石斧の比率が高くなる。栗林2式新段階は、北信地域が太形蛤刃石斧生産の拠点的地域であったと位置付けられており、太形蛤刃石斧における大規模製作址である榎田遺跡と松原遺跡から大量の太形蛤刃石斧の製品および未製品が出土している（町田2008、馬場2009）。その影響を受けたためか、この時期では太形蛤刃石斧の組成比が増大し、扁平片刃石斧の比率と拮抗するようになる。吉田式期では磨製石斧全体の出土量が減り、石器群全体の組成比においても減少する。

石鏃は栗林1式期では打製石鏃が目立ち、磨製石鏃が非常に少ない状況が、栗林2式新段階には打製石鏃と磨製石鏃の比率が拮抗するようになり、吉田式期には磨製石鏃の比率が打製石鏃を逆転する。形態は各時期を通して、打製石鏃はA-1が中心であるが栗林2式新段階にはA-2、B-2のものがみられるようになり、吉田式期にはDが確認できるようになる。磨製石鏃は各時期を通じてIが中心であり、Eも常に一定の割合で確認できる。

打製石斧や大型直縁刃石器、小型直縁刃石器、磨製石包丁は栗林式期を通して一定の割合で組成に含まれていたが、吉田式期になると激減する。有肩扇状形石器は北信地域ではほとんど確認することができなかった。

敲石や砥石等は栗林1式期から吉田式期にかけて大きな変化は読み取れないが、常に一定程度組

成に含まれており、吉田式期では凹石が増えるようである。

以上のように石器組成の変遷を概観してきたが、北信地域の栗林式期から吉田式期にかけての石器組成の大きな画期として栗林2式新段階と吉田式期を指摘できよう。

栗林2式新段階には、太形蛤刃石斧の生産拠点が展開した影響か、栗林2式古段階において扁平片刃石斧に比べ少なかった太形蛤刃石斧の比率が増し、両者が拮抗するようになる。石鏃においても、それまで打製石鏃優勢であった状況が磨製石鏃と拮抗するようになる。

吉田式期では石器全体の出土量が減少する。また磨製石鏃が打製石鏃を凌ぐようになり、打製石鏃においてはDがみられるようになる狩猟具、武器の大きな変化がある。さらに栗林1式期から組成の中にある程度の割合で存在してきた打製石斧や大型直縁刃石器、小形直縁刃石器、磨製石包丁が吉田式期に激減することが指摘できる。

次に、この様な石器組成の変遷が意味することを、特にその比率に注目し、生産・流通システムの変化、道具の鉄器化に関連した私見を述べたい。その際に、石器を機能的に大別して比較することが有効であると思われる。弥生時代の石器は、これまでの学史の中で伐採斧=太形蛤刃石斧、加工斧=扁平片刃石斧など機能の位置づけがなされている石器が多数ある。また近年は原田幹氏の分析をはじめとした使用痕研究が精力的に進められており、大型直縁刃石器や小型直縁刃石器、有肩扇状形石器の多くが農耕に用いられた石器であることが指摘されている（斎野 1993・1994、原田 2003・2009）。本稿ではこれらの例に鑑み石核以外の石器を以下のように機能別に大別した。

- ・伐採斧:太形蛤刃石斧
- ・加工斧:扁平片刃石斧、小形磨製石斧
- ・狩猟具、武器:打製石鏃、磨製石鏃
- ・農具:打製石斧、大型直縁刃石器、小型直縁刃石器、有肩扇状形石器、磨製石包丁
- ・加工工具1:磨石、凹石、敲石、みがき石、石鎧、台石、石皿、砥石

・加工工具2:石錐、楔形石器

第3図は機能別に大別した石器組成の比率を表したものである。

伐採斧と加工斧は磨製石斧の生産・流通システムはもとより、木製品の生産・流通システムの影響も受ける。栗林1式期で両者の組成比はほぼ同じであったのが栗林2式古段階には加工斧が優勢になる。石川県八日市地方遺跡ではこれより以前の弥生時代中期中葉において伐採は、鉄斧を所有する集団を中心とした複数の集団が共同で行い、製品に仕上げる加工は各集団または個人で鉄および石の斧を用いて行われた様子が指摘された（樋口 2019、鶴来・下濱 2019）。北信地域においてもこのような木製品の生産・流通システムに伴い伐採斧と加工斧の組成に変化が生じた可能性が指摘できるのではないか。栗林2式新段階以降伐採斧と加工斧の比率は拮抗するが、これは当該地域が伐採斧の一大生産拠点だったことが影響している。吉田式期での磨製石斧全体の減少は木製品製作における道具の鉄器化を示している可能性がある。

吉田式期では農具に関わる石器が激減する。これは農具における材質転換や農耕に伴う生産・流通システムの変革を表す事象として理解することができよう。特に水田稲作の普及という生産システムの変化が農具の石から木材あるいは鉄への材質転換を促した可能性を指摘したい。

道具の鉄器化については、鉄斧が南大原遺跡の栗林2式新段階～3式期の住居と春山・春山B遺跡の栗林3式期の住居から、鉄鏃が南大原遺跡の栗林2式新段階と吉田式期の住居から出土しており、斧と鏃の鉄器化が認められる。斧については先に指摘したとおりである。また、石鏃は吉田式期において数は減るもの組成比は栗林式期よりも高い。このことは、鏃の鉄器化が進む一方、石鏃も一定の役割を担い、両者の共存や補完的関係、材質による使い分けを考えることができよう。加工工具1は弥生時代を通してさまざまな対象物の加工に用いられた道具と考えられ、その一部は鉄器加工にも用いられたであろう。しかし、栗林式

期から吉田式期において組成比の大きな増減は認められない。これは鉄器加工という新技術の導入に際して、旧来から使用してきた道具を応用して用いることにより、新技術導入のコストおよびリスクを低減していた様相を示しているかもしれない。鉄器加工技術導入の在り方を示す事象として注目される。

5 おわりに

北信地域における栗林式期から吉田式期にかけてという、地域・時期を限定した分析であったが、それでも石器組成の変化を読み取ることができた。最後に本年度出土した南大原遺跡の石器の整理・報告に向け、本稿を草するにあたり感じた課題を述べたい。石器組成から解釈に至る過程で論理的飛躍があることは黒沢浩氏により指摘されている。これまでの弥生石器の組成を扱った論考は石器を機能別に分類し、生業の変化や鉄器化を読み取ろうとするもの多かった。その結果石器機能の組成についての解釈と石器系統の組成についての解釈が混同していると指摘される（黒沢 1995）。本稿では機能についての解釈と系統についての解釈の混同をさけるため、石器を形態別に分類した後、機能別に大別するという方法をとり、石器の系統的変化と機能的変化を分離して考えようとした。しかし本稿では石器の最も基礎的分析である技術型式学的分析は行えていない。石器の地域差、時期差を抽出し、その系統を理解するためには技術型式学に立脚した分析を欠くことができないはずであるが、弥生時代石器研究では大陸系磨製石器の一部を除きあまり議論されていないように感じる。その他黒沢氏が指摘している標本サイズの問題等、本稿は氏の指摘した課題の多くがそのまま残されてしまっている。今後、弥生石器を報告する際に解決していくべき課題である。

註

- 1) 原田幹氏は使用痕分析から、小形の石器を「穂摘み具」とした。さらに大型直線刃石器を稻株等の残稈処理や除草作業の道具とし、「穂摘み具」+大型直線刃石器のセット関係を明らかにした（原田 2003・2009）。両者を区分し、セット関係を明らかにすることは農耕の受容や定着を考える際に重要になると思われる。本稿はこの石器を形態と法量で分類しているため「穂摘み具」ではなく、小型直線刃石器と便宜上呼ぶ。

2) 有肩扇状形石器を斎野氏は大型直線刃石器に含んでいる。使用用途が同一であるという使用痕分析の結果を反映した分類であるが、本稿では形態的差異を評価し、大型直線刃石器とは区分する。

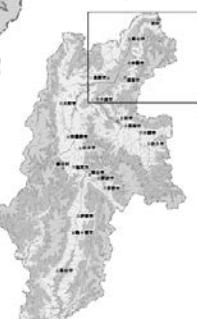
3) 南大原遺跡出土石器は 2011~2013 年度の調査で出土した既報告資料のみを扱い、今年度調査で出土した石器は組成に含めていない。

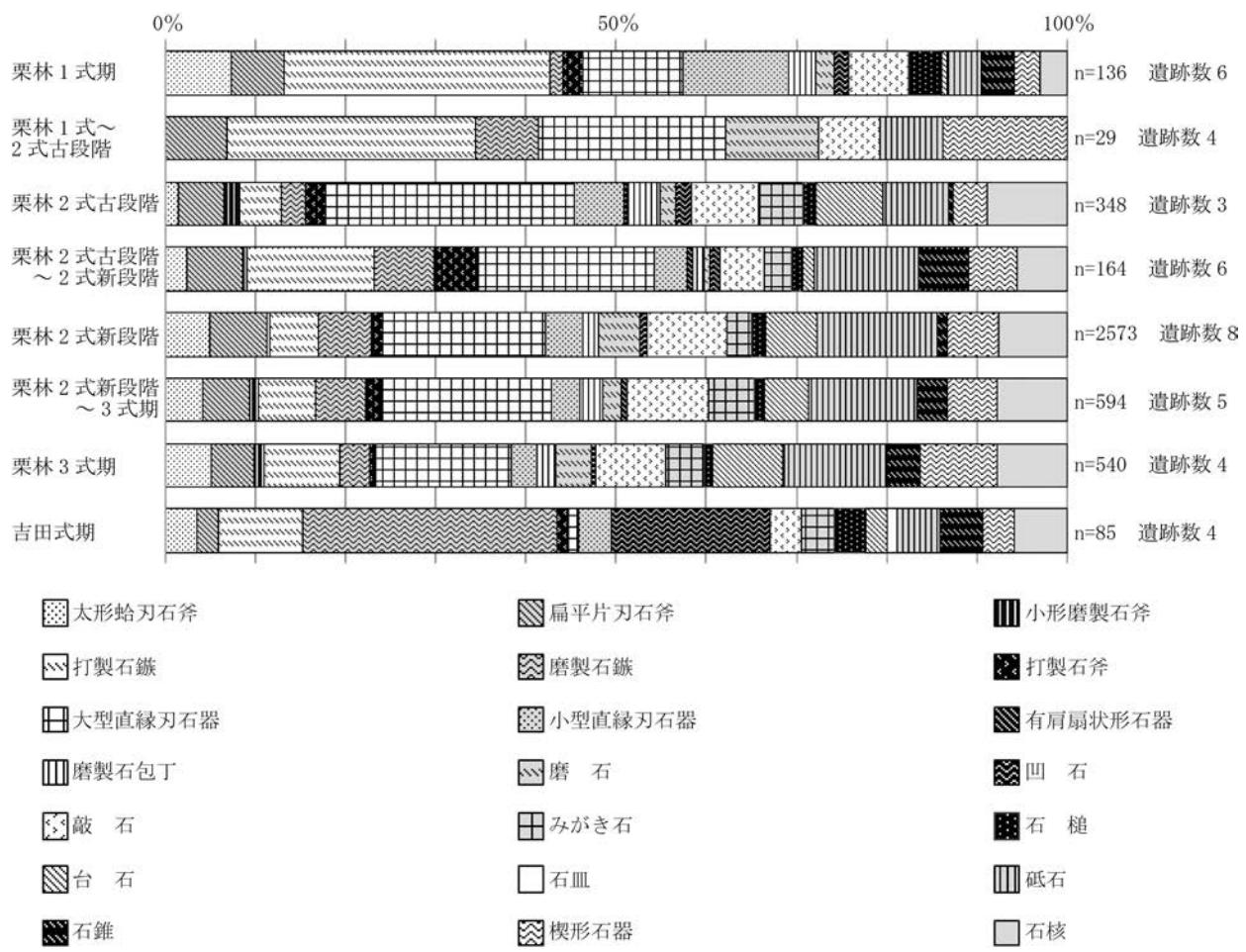
参考文献

- 石川日出志 1994「東日本の大陸系磨製石器」『考古学研究』41-2
 石川日出志 1996「弥生時代石器」『考古学雑誌』82-2
 石川日出志 2002「栗林式土器の形式過程」『長野県考古学会誌』99・100
 黒沢浩 1995「弥生時代石器研究に寄せて」『みづほ』15
 斎野裕彦 1993・1994「弥生時代の大形直線刃石器 上・下」『弥生文化博物館研究報告』2・3
 杉山浩平 2010「東日本弥生社会の石器研究」
 鶴来航介・下濱貴子 2019「八日市地方遺跡の生産活動と確認調査を通じた理解」『考古学研究』65-4
 鶴田典昭・町田勝則 2016「南大原遺跡」
 寺島孝典 1999「長野盆地南部の様相」『長野県の弥生土器編年』
 馬場伸一郎 2009「磨製石斧の「流通」と「交易」-栗林式土器文化の再考材料として-」『中部の弥生時代研究』
 原田幹 2003「石製農具の使用痕研究-収穫に関わる石器についての現状と課題-」『古代』113
 原田幹 2009「弥生石器の使用痕研究」『中部の弥生時代研究』
 横上昇 2019「「北陸型」木製品の展開と地域交流-工具の問題も含めて-」『北陸の弥生世界わざとこころ』
 町田勝則 1992「信濃における弥生時代石器文化の終焉」『弥生時代の石器-その始まりと終わり-』
 町田勝則 1996「石器の研究法-報告文作成に伴う観察・記録法①」『長野県の考古学』
 町田勝則 1997「長野県北部（千曲川流域）の石器組成の変遷」『農耕開始期の石器組成』4
 町田勝則 2008「石器に弥生の社会を読む」『赤い土器のクニの考古学』

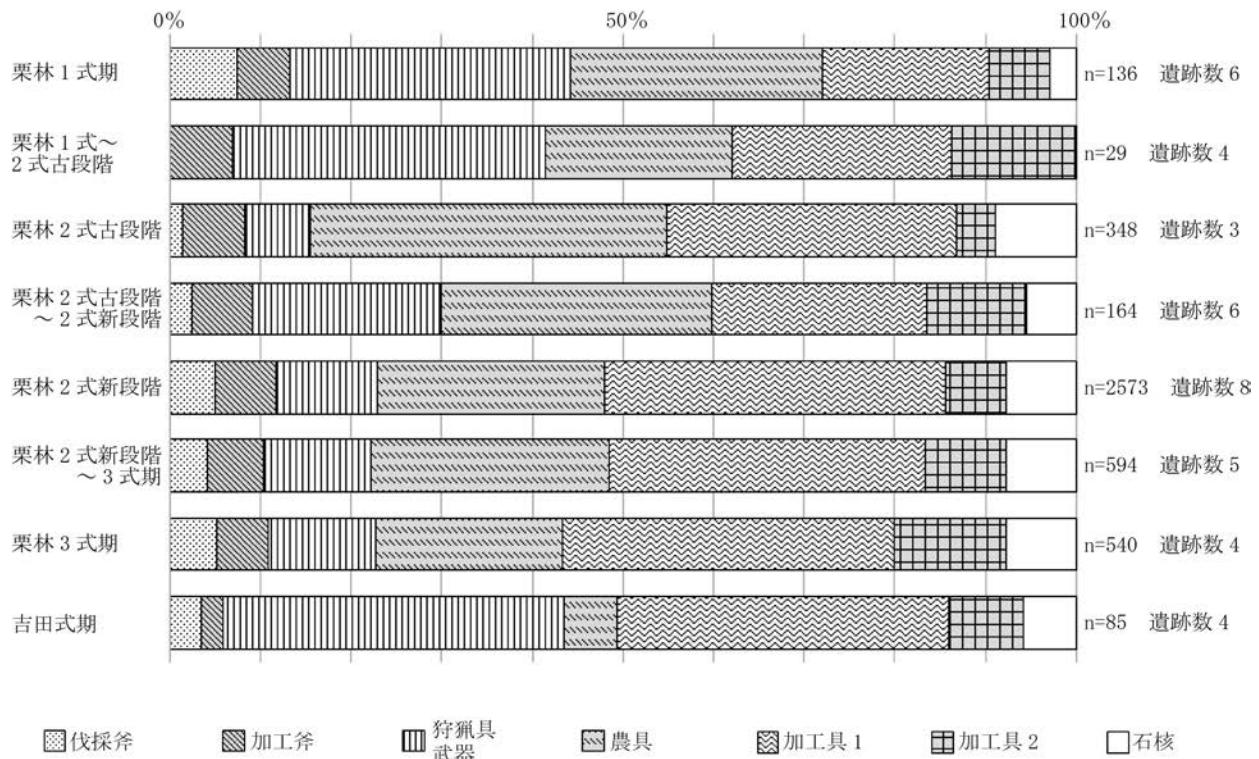


第1図 遺跡分布図

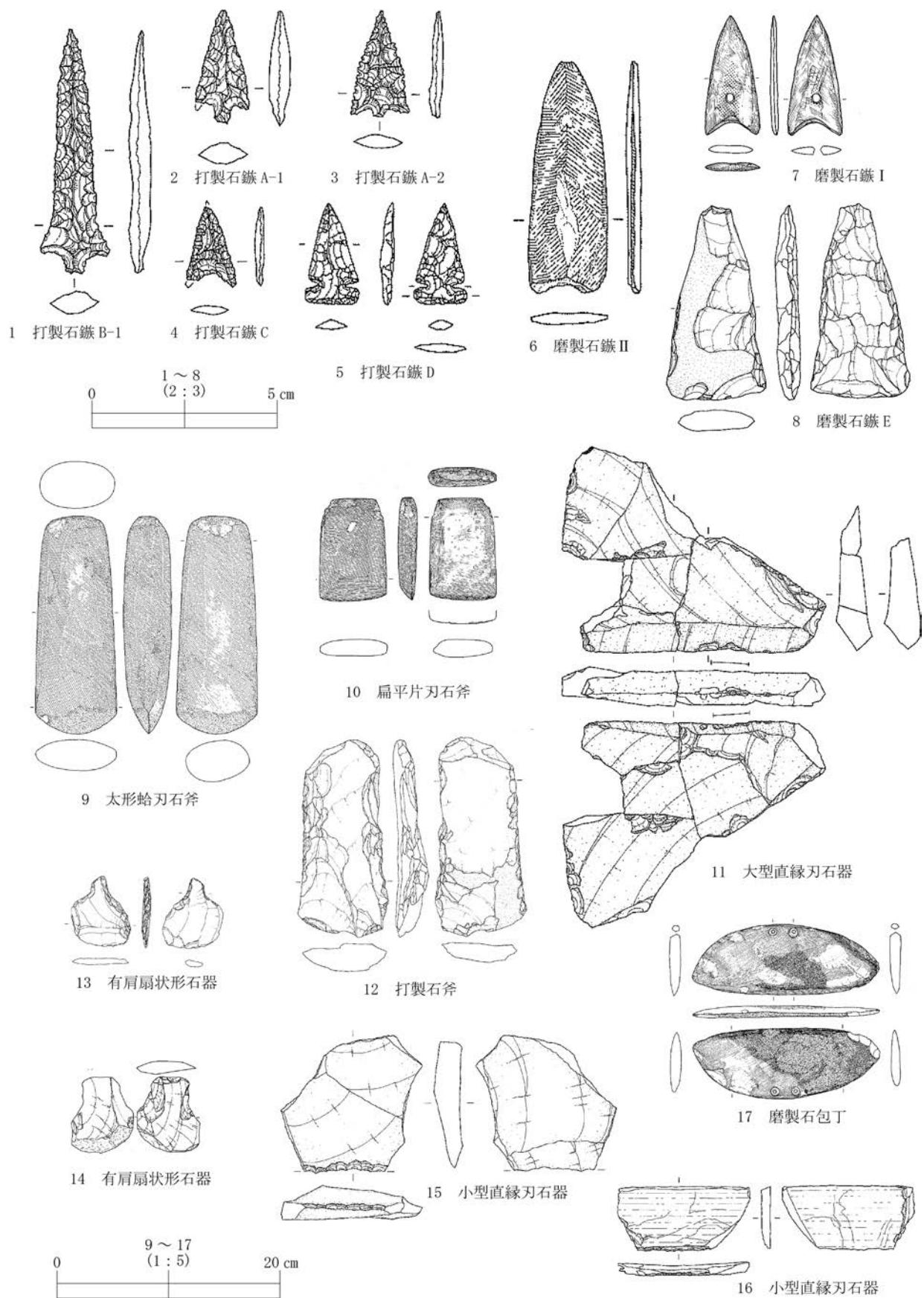




第2図 時期別石器組成表



第3図 時期別石器機能大別組成表



第4図 北信地域における栗林式期から吉田式期の石器
 (南大原遺跡: 1 ~ 4、11、15、16 長野吉田高校グラウンド遺跡: 5、6
 横田遺跡: 7、8、12 春山・春山B遺跡: 9 松原遺跡: 10、13、17 照丘遺跡: 14)

第1表 遺跡別出土石器一覧